

『多聞院日記』に記録されたナラノヤエザクラ

川端 一弘

日本科学史学会生物学史分科会 生物学史研究 No.77 別刷
2006年12月

『多聞院日記』に記録されたナラノヤエザクラ*

川端 一弘**

はじめに

ナラノヤエザクラはその歴史的な背景を含めて貴重な桜として大正12年3月7日に天然記念物に指定された。この天然記念物指定に至る経緯は北川(1997)が指摘するまで正確に紹介されることはなかった。その因については小清水(1951)の説が膾炙されていたことが挙げられる。川端(1999)は「同氏(筆者注、三好学)は大正十一年の春、偶々奈良市の東北の片隅に世人に忘れられた様な知足院の裏藪の中に、人知れず咲いていたと気品ある古びた八重桜を親て、桜品や古名録に記載されている古花に類する珍奇な八重桜と同種のものなりと看做され、」というナラノヤエザクラ三好学発見説が何等根拠のないものであることを検証した。知足院のナラノヤエザクラは小清水が実見したかのごとく叙情表現したように人知れず存在していたのではなく、岡本勇治(著作年不詳)¹、が天然記念物として価値あるものと三好学へ推薦したものである。

また、ナラノヤエザクラの呼称については、奈良では単に「八重桜」とされることが多く(名所絵図などでは八重桜と表記してある)、地名に因んだと思われる「奈良桜」(あるいは奈良八重桜の略称か)、伊勢大輔の和歌に因む「奈良の都の八重桜」がある。大井次郎・太田洋愛(1973)では「奈良八重桜」「寧楽八重桜」が「奈良桜」の異名となっているが、これは古典に対する誤解から生じた錯誤である²。このようにナラノヤエザクラについては植物学者による誤認が膾炙し、歴史文献の検証が充分でない状況にある。

川端(2001)はナラノヤエザクラが江戸時代初期には東円堂の故事に因む「東円寺さくら」と呼ばれていたことを紹介した。この東円寺とは興福寺勸禅院東円堂のことで『沙石集』にナラノヤエザクラが「当ても東円堂の前にあり」とあることに因っている。

この東円堂を手がかりに新たなナラノヤエザクラ資料を紹介してみたい。

ナラノヤエザクラの特色

ナラノヤエザクラは葉柄や花梗に毛があり、葉の裏面に光沢があるなどカスミザクラの形態

* 2006年1月9日受理

** 〒630-0045 奈良市千代ヶ丘3-1-60

特色を示していることからカスミザクラが重弁化したものであるとされる。このことは天然記念物に推薦した岡本勇治が指摘している（当時はカスミザクラの和名が使用されずケヤマザクラが使用されている。）。カスミザクラは奈良県では春日山原始林内や近隣の里山に分布しており珍しいサクラではない。

ナラノヤエザクラの開花はヤマザクラの開花する四月上旬に比べかなり遅く、例年四月二十五日を過ぎる頃に満開を見るようである(奈良市を基準にしている)。カスミザクラも同様に遅咲きのサクラとして知られている。

文献では大江親通が撰述したといわれる『七大寺巡礼私記』（奈良国立文化財研究所史料第22冊より）には

其堂（筆者注、東円堂）南門之西脇有桜樹、所謂奈良都之八重桜是也、古伝云、此桜一切桜花散之後、始以開敷、是為奇特云々

アハレテフコトヲアマタニヤラシトヤ、ハルニヲクレテヒトリサクラム

或人云、此哥者在古今和歌集、故人見卯月桜花詠也、即此桜云々、予三月十五日見件木未咲、誠遅桜也、甚叶故人詠者也、

とある。東円堂の南門の西脇にあるサクラがナラノヤエザクラであり、遅咲きのサクラであるとし、古今和歌集に載せられた和歌にある「春におくれて」咲く桜がナラノヤエザクラであるとしている。

このことは長田（1984）が指摘をしており、ナラノヤエザクラが遅咲きのサクラであることは古来より知られている。

『多聞院日記』の記載

『多聞院日記』（角川書店版を参照した）には「東円堂桜」「八重桜」について以下の記載がある。

天正十六年二月廿六日条

木継甚四郎来、東円堂桜二本ツク、十後宿ニモ四本ツク

天正十八年三月廿六日条

於成福院供目代悦酒如形宗禪房沙汰之、東円堂桜盛、從尊識房一枝給之内、分テ十後へ一枝遣之、当坊継之、当年ハ四年目ノ間、一定可咲と令内悦之処、全不咲、明年ハ可咲歟 露命不審〃〃

天正二十年三月十六日条

眞如無為一問答読了、八重桜一枝来間、取分一枝ハ一門様へ上、大枝ハ北庵法印へ遣了、見事無類、愚坊ニツク当年五年ニ及遂不咲、恨入事也、明年ハ可咲歟、露命不定

文禄三年三月六日条

東円堂桜ツク処、始而咲間 花見トテウトンニテ酒進了、

である。

天正十六年（1588）二月二十六日の日記には東円堂桜とある。索引では東円堂と桜を別個にして解釈を行っているようであるが、これは「東円堂桜」として理解してよいのではなかろうか。

天正十八年には「東円堂桜盛」とあり、「当坊継之、当年ハ四年日ノ間、一定可咲と令内悦之処、全不咲、明年ハ可咲歟」とある。継いだという「之」は東円堂桜もしくは東円堂の桜である。

天正二十年には八重桜の記載があり、つづけて英俊は「愚坊ニツク当年五年ニ及遂不咲」と記している。天正十六年に東円堂桜が二本ツクとしており、五年目に当たる天正二十年の「愚坊ニツク」サクラは東円堂桜であることは明白であろう。東円堂桜が八重桜であることが理解できる。

『七大寺巡礼私記』の年代（12世紀）には東円堂には門の西脇にナラノヤエザクラが生育していたことが知られる。東円堂桜もしくは東円堂の桜となれば『多聞院日記』記載のこの八重桜をナラノヤエザクラとするのが妥当であろう。

さきに（川端、2001）江戸時代初期にナラノヤエザクラが東円寺桜と呼ばれていたことを検証した。正確には東円寺ではなく東円堂であるが、奈良の市民に勧禪院内の東円堂がナラノヤエザクラのお寺として東円寺と呼ばれていたと理解してよいと思われる。

英俊の時代より少し後（東円寺桜を記載した『奈良名所八重桜』は延宝六年（1678）刊行）には奈良の市民から「東円寺桜」と呼称されていることから、英俊の時代にすでにナラノヤエザクラは「東円堂桜」と呼称されていたのではなかろうか。東円堂桜は東円堂の桜と理解するよりも固有名詞化した「東円堂桜」とするのが妥当と思われる。

東円堂桜がナラノヤエザクラであるならば、この東円堂桜の開花時期を調べてみたい。

天正十六年には他にサクラの記載はないが、天正十八年には三月十二日に「一 花盛也、中坊源五今日金藏院へ請用云々、ナラ中花見多シ、吉野参事々敷也」とあり、三月二十六日に「東円堂桜盛」とあるから東円堂桜は遅咲きのサクラである。

天正二十年においては二月二十八日「方々花漸盛過了、貴賤花見増倍也」、同二十九日「於大乘院花見在之、各出人数廿人余」とあり、八重桜の「見事無類」とあるのが三月十六日である。

文禄三年（1594）は著名な太閤秀吉の吉野の花見があった年である。『多聞院日記』には二月二十日「諸方花盛也」とあり、「東円堂桜ツク処、始而咲間」云々とあるのが三月六日である。ちなみに太閤秀吉の吉野花見であるが、英俊は太閤秀吉が途中奈良に宿泊したことを記したあと、二月二十七日「従弘暁関白殿各々吉野へ御越云々」、二月二十八日「従夜中大雨下、吉野花見、沈思歟」、二十九日「吉野山花見芸能、雨下可為散々歟」、三月一日「太閤ハ今日吉野ヨリ高野へ」とある。英俊は吉野山の花見頃より遅い三月六日に東円堂桜が始めて花を開いたと酒を楽しんでいる。

いずれも遅咲きのサクラであることを記し、現在の開花時期と比較してもナラノヤエザクラとして不自然ではない。

『多聞院日記』にナラノヤエザクラが記されているのである。

増殖されていたナラノヤエザクラ

「東円堂桜」がナラノヤエザクラであることを検証した。いま一つ問題としたいのは、天正十六年の「木継甚四郎来、東円堂桜二本ツク、十後宿ニモ四本ツク」の記載である。

木継甚四郎の名前はこの日の記載のみであるが、天正十四年二月十五日「木継善四郎ミカン・ウシユキツ・ツキマセノツキタルヲ持来間植了」、天正十五年二月十一日「一 木ツキ善四郎桜木テマリノ如ナル花也トテ、ツキタルヲ持来植了、長柿二本ツカセ了」の記載がある。

日記には「木継甚四郎」と「木継善四郎」の名前が一年おきに書かれている。両者とも植木に関係する人物であることが記されており、木継（木ツキ）は職業を表しているものかと思われる。現在で云う園芸業者であろう。

こうして併記してみると甚四郎は善四郎の誤写で両者は同一人物ではないかと推量されるが、書誌学の専門家の判断を仰ぎたい。

天正十五年に「テマリノ如ナル花也」とあるのは東円堂桜であり、天正十六年に二本活着したことが「二本ツク」ではなかろうか。「十後」は日記にしばしば記され、十市後室である³。十後の宿にも四本が活着したとある。

英俊の坊、すなわち多聞院に植えられたナラノヤエザクラはすぐには開花せず英俊を毎年落胆させる。しかし、七年目にして初めて開花し英俊を喜ばす。英俊は開花したナラノヤエザクラを前に「花見トテ」「うどん」を肴に「酒進」である。

うどんを肴に酒を飲むことは、現在人には少し奇異なことであるが、吉田（1991）は『多聞院日記』の食生活を調査したなかで「また餅を肴に酒を飲むのは中世の流行であったか、あるいは人々が貧乏であったためかとは篠田統氏の疑問であるが、たしかに酒の肴は餅、田楽、山芋、岩茸、松茸の吸物、干飯、焼松茸などで占められている。」としている。

ナラノヤエザクラを移植して自坊で楽しむ僧侶も多かったのではなかろうか。

まとめ

『多聞院日記』に記された東円堂桜をてがかりにナラノヤエザクラを検証してみた。

ナラノヤエザクラは多くの名称で呼ばれているが、そのなかに「東円堂桜」、「東円寺桜」を加えることができる。東円堂にナラノヤエザクラが最初に植えられたのはいつのことか分からないが（『沙石集』以前の時代）、奈良においては古くから東円堂のサクラといえばナラノヤエザクラが意識されているのである。即ち「東円堂桜」といえばナラノヤエザクラを指していたのである。

またナラノヤエザクラが「木継」と呼ばれる人により増殖され、複数のナラノヤエザクラが存在していることを紹介した。

ナラノヤエザクラは東円堂に植えられたもののみ注視されるが、多聞院、十後の宿や中院(川端、2001)にも記録されている。そのほかに記録に残っていないものも多くあることであろう。

ナラノヤエザクラについては挿し木が難しくその後継樹の維持が困難であるとされ、またナラノヤエザクラの寿命は長くないことから植物学者には原種の持続性に疑問を持つ人があるが、早くから取り木などの技術があったものと思われる。その持続性を疑問視する意見にも答えられたと思う。ナラノヤエザクラの生育は東円堂だけに拘泥する必要はないのである。

注

- 1 『春日山原始林植物調査報告』(現在奈良県立図書情報館に所蔵されているものが唯一のものである)は文末のページが欠けており奥付が分からない。三好学が岡本への追悼文「奈良県天然記念物保存に関して岡本勇治氏を想ふ」『史蹟名勝天然記念物』8(1933)に「岡本氏の調査された春日山の植物は大正十二年に起草された「報告」(未刊行)に詳述してある。」と記し、この「報告」が『春日山原始林植物調査報告』にあたりと考えることもできる。また昭和4年の奈良県史蹟名勝天然記念物調査会総会において再度謄写版印刷された同報告書が提出されており、そこには1926.3.5.の日付が記されている。この日付も無視できない。詳細は川端「岡本勇治『春日山原始林植物調査報告』の著作年について」『奈良植物研究』26(2003)を参照されたい。
- 2 大井次郎の「奈良桜」記事は簡略なものである。松岡玄達(恕庵)『桜品』(1758)を中心に記述してあるが、『桜品』からの引用文はそのものからの引用でなく、『沙石集』との錯誤があるようである。また、大井は文献のなんらの検証もなく「『奈良桜』は『奈良八重桜』『奈良都』『寧楽八重桜』などの異名がある。」としている。「奈良桜」については川端(2003)が『花壇地錦抄』(1695)に「なら桜 いにしえのならの八重ざくらか」とあり、奈良から離れた江戸の植木屋仲間が短く呼びならしたものであるとした。川端は同時代の奈良の名所案内記によりナラノヤエザクラの呼称を検証している。「奈良桜」がナラノヤエザクラの異名である。
- 3 十市後室については『奈良県史11 大和武士』(1993) P379に「十市遠勝亡きあと、彼には嗣子がなかった関係もあって同家の正統は断絶したが、その上遺領の問題もからんで十市家中は二派に分裂した。娘御料は永年松永方の質となっていた関係で当人は松永方に親近感をもっており、家中のうちには母の十市後室と御料を奉じて松永久秀に依拠しようとするものもいた(松永派。)」とある。

参考文献

- 大井次郎・太田洋愛(1973) 奈良桜『日本桜集』平凡社
 長田光男編(1984) 知足院と奈良八重桜『奈良点描』3 清文堂出版
 岡本勇治(不詳)『春日山原始林植物調査報告』(謄写版印刷)
 川端一弘(1999) ナラノヤエザクラ天然記念物指定についての一検証『奈良植物研究会会報』67
 ——(2001) 江戸時代前期の「ナラノヤエザクラ」の記録『奈良植物研究』23
 北川尚史(1997)「岡本勇治—奈良県植物研究の先駆者—」『複製版大和植物志』1-11大和精版印刷
 小清水卓二(1951)「奈良八重桜」『大和文華』2:53大和文華館
 吉田元(1991)『日本の食と酒』人文書院、P143

辻善之助編『多聞院日記』角川書店再版(1938→1967)
 『七大寺巡礼私記』奈良国立文化財研究所史料第22冊(1982)